IMAJ ニューズ
NO.22
国際MRA日本協会機関誌
発行年月日　昭和55年9月1日
発行所　国際MRA日本協会
発行者　柳沢錬造
（非売品）　TEL. 03—374—7600
INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

1980年 第4回 国際産業人会議特集

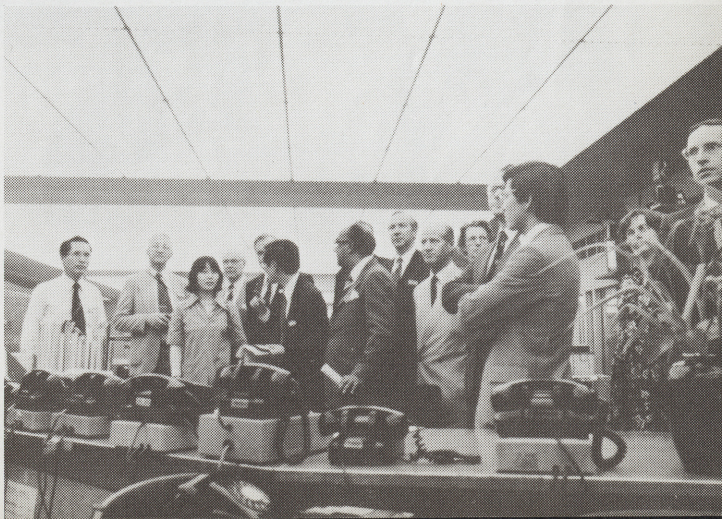
第四回国際産業人会議は本年も十二ケ国より三十二名の海外代表を迎え「地球時代と産業人の役割」をメインテーマに箱根・東京・関西と各地で熱心な話し合いが展開されましたがここにレポートを集録し会議の模様をご紹介致します

食卓を囲んで交流の輪が拡がる。中央はヴァン・ダ・ウォーター氏アメリカ・経営コンサルタント元カルフォルニア大教授

「80年代における人類の安全保障」をテーマに討議したⒷグループ分科会

海外の代表はそれぞれ日本の民間大使となって帰ると語った（東京大会）司会をするのは柳沢錬造参議院議員

新幹線司令室のシステムに眼をみはる海外代表達国労、森影委員長（左端）を訪ねたカデッヂ氏（スイス鉄道労組中央執行委員）夫妻、右端は岸国際部長



■箱根会議■

第四回国際産業人会議は去る五月二十三日から二十五日の三日間にわたって『地球時代と産業人の役割―八十年代指導者の資質を求めて』をテーマに新緑の箱根強羅ホテルで開催された。

イギリス、西ドイツ、スイス、ノルウェイ、カナダ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、インド、中華民国、香港、そして大韓民国という十二カ国よりの三十二名の海外代表、加えてファラポ駐日パプアニューギニア大使夫人の参加をも得た。わが国側からも産業、経済、労働各界から多数が参加し延三百二十四名が本会議と分科会の形式で熱心に話し合った。会議を通して三つの流れが特徴づけられた。まず国としての自己中心主義から如何にして自由になるかということ。第二に個人として、また社会的グループ間で、そして国ぐにの間でどのようにして信頼関係を築いていくかということ。そして精神的、道義的革命の必要性は皆が認めるところであるが、それをどのようにして行うかを理論でなく実際の体験に基づいて話し合った。

現在、スイスのMRAセンターで毎年、世界の産業人による会議が開催されているが、この箱根会議はそれと連携を保ちながら大きな役割を果たしていると言える。この会議を通して現在、世界的な関心を集めているインドシナ難民問題に対して日本全国から救援の手が差しのべられ、また青年達がボランティアとしてキャンプで奉仕している実情が報告された。また、他の参加者からは在日留学生六千人と日本社会の橋渡しを実際に行っている情況が述べられた。また、安楽な自国での生活を止め、香港に移り住んで中国語を学び、両国間の橋渡しに挺身している参加者の一人の若いオーストラリア人の青年の話は印象的であった。相互依存が益ます強まりつつあるこの地球時代において、個々人がこのように実際に行動している事実が述べられ、また相互信頼の鍵は言行一致であることが個人の体験を通して実証された。また、イギリスの経営者の一人は、二十五年間絶対正直を基本にして経営してきたが立派に経営が成り立ったと証言した。

会議の開催期間中は参加者の宿舎として東芝芝翠荘、宮城野荘、日通函養荘、朝日生命木賀の里寮などが提供されたので参加者相互の理解と親睦をたかめることに大きく役立った。また第二日目の夕刻には東芝芝翠荘で歓迎パーティが催されたが地元の郷土芸能の披露に応えて海外から参加したスイスのシュプレング夫妻、カデッヂ夫妻が感謝の心をこめてスイスヨーデルを歌い、ノルウェイのブローヴィッヒ夫妻、ウイルヘルムセン氏が同じく民族舞踊を披露するなどの交歓風景もみられた。

分科会では『八十年代の家庭、家族』、『八十年代の人類の安全保障』そして『八〇年代の産業社会における指導者のあるべき姿』という三つのテーマ別に話し合いが行われた。本会議と分科会は共に、参加企業の労使双方の代表が綿密な連繋と協力の下に司会を初めとする進行を担当した。

■東京会議■

東京会議は五月二十六日、午後一時から憲政記念館ホールで開催された。『地球時代と産業人の役割』というテーマに関心を寄せる多くの人びとが東京近県、関西、そして九州からも駆けつけて海外代表を中心とする講演者の話しに耳を傾けた。司会の参議院議員柳沢錬造氏は「日本の自由と民主主義、エネルギーの確保、国の安全保障といった当面する重要課題のすべてはグローバルな立場にたって対処することによってのみ解決が可能である」と述べ、「八十年代をリードする指導者である本日の参加者がその確信を実行するならば〝道は必ず開ける〟」と呼びかけた。

東芝顧問の高瀬正二氏の開会挨拶に始まって世界経済調査会会長の木内信胤氏が箱根会議の内容の紹介を兼ねて一般の国際会議とMRAの産業人会議の違いとその特徴について話した。ノルウェイのウイルヘルムセン氏、スイスの建設会社社長のアンリカー氏、及び鉄道労組中央執行委員のカデッヂ夫妻、英国代表で『地球病の時代』の著者でありジャーナリストのリーン氏夫妻、同じく元国連公使のマッケンジー夫妻など多彩な国際代表は、夫妻ともども、それぞれの立場から箱根会議に参加した意義を述べた。またインドのマトゥアー氏、韓国のチュン・ジュン氏などアジア地区の代表の発言を交えて、わが国からは三菱総研会長の中島正樹氏、ダイキン工業社長山田稔氏、国鉄顧問の瀧山養氏、東芝EMI総務部長の北原良雄氏などが意見を発表した。なお中央労働委員会会長の平田富太郎氏、元陸幕長杉田一次氏、IMF・JC議長の宮田義二氏らも参加していた。若い人を代表して発言した中嶋邦子さんは、「主婦として家庭のことだけを考えているだけでは十分でない。世界に眼を向けなくてはということをMRAを通して学んだ」と発表した。同じく最近オーストラリアから帰国した多羅みちえさんは、「MRAは自分に如何に生きるべきかを教えてくれた」と述べた。閉会の後の懇親パーティーも会議の余韻を残すかのように和やかなうちにも熱気に溢れたものとなった。

国際産業人会議、箱根会議開会に当っての世話人代表の挨拶

東京芝浦電気㈱
顧問　高瀬正二氏

日本における国際産業人会議も早いもので第四回目を迎えましたが、ここ箱根に外国の皆様をお迎えするのも第三回目になりました。本日は、本来ならば国際MRA日本協会土光敏夫会長から御挨拶申し上げるべきところですが、都合によりこの箱根会議に出席できませんので、代わって副会長として私から一言御挨拶申し上げます。なお、土光会長は二十六日の東京会議において御挨拶申し上げることになると思います。ところで、「地球は小さくなった」とよく話題にのぼる反面、「地球存亡の危機」であるとか、「人類存亡の危機」という言葉が新聞等を賑わすことも、最近の動きであります。文明の発達により、各国間の距離や時間が縮まった反面、今まで気づかなかった歴史、文化、生活様式、思考の異なった国々とのギャップが以前よりも顕著に現われ、予期しなかった対岸の火事が突如として自国の垣根の内に割り込んできていることも多々ございます。自国の繁栄を追求すること自体、自由主義の原則に何ら反することではありませんが、自分の国の前進のみをひたむきに考える時代は過ぎ去り、自国の生活基盤を他国の繁栄との調和を図る中で確立していくという見地からも検討せざるを得ないのが、今日の時代であります。「地球時代」とはまさに「相互依存時代」であり、どの国も「同じ土俵」の上に立って物事を考えなければならない時代であると考えます。私は、スイスの「コー」の産業人会議や、箱根会議において、「同じ土俵の上に立って対話から協調へ」ということを訴え続けてまいりました。最近の各国の動きをみますと、まさに、「同じ土俵の上に立つ」ということがいかに重要であるかということがご理解いただけると考えます。その意味からも、この箱根会議の使命が今まで以上に重要なものとなってきていると思います。さて、私なりに地球時代における私達産業人の役割りということを考えてみますに、次のことが思い浮かびます。

一、お互いの問題を認識しあい、かつそれを自分のものとして考えること。

二、誰が正しいかではなく、何が正しいかで判断すること。

三、自分が持てるものをお互いに出し合って、身近な問題から責任をとっていくこと。

その第三のポイントであります「貢献」と「責任」という問題は、ややもすると、我々日本人にとって、見過ごしがちなポイントであります。その意味においては、我が国の豊かな人的資源を諸外国の方々のお役に立ててこなかったということは反省させられます。

しかしながら、我が国の考え方を外国に紹介する役割を果たしてくれたのが、スイスの「コー」であり、箱根であります。そこでは、揺るぎない信頼に基づいて多くのギャップが、埋められて来ました。

「労使は鏡のようだ」と私はよく思いますが、人種間も、又親子の間もいわば鏡であり、一人一人の生活の鏡にあたるものがフランク・ブックマン博士の提唱した四つの道義基準、即ち

「絶対正直」
「絶対純潔」
「絶対無私」
「絶対愛」

と考えます。この四つの道義基準を鏡として一人一人が自分の生活をふり返る時、一人一人の生き方が、いかに職場や家庭とのかかわり合いが強いか、更には国や地球全体へのかかわり合いが強いかということが手にとるように理解できると思います。

この箱根会議を通して、こうした鏡となるべき考え方を産業の面からも、家庭の面からも更に産業界の指導者という面からも、是非皆様で模索していただきたいと存じます。

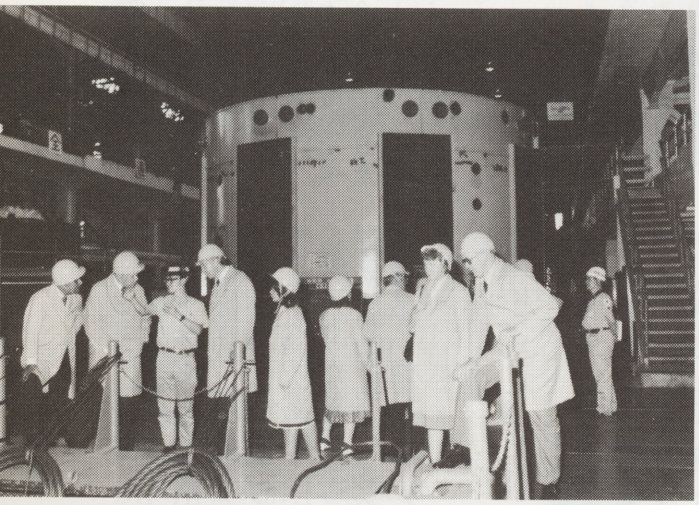
今回、日本通運、朝日生命両社と、私共東芝の三社で、こうした趣旨の集いのおもてなしをさせていただけることは、大変光栄なことでございます。うかがいますところ、外国代表の方々、それぞれお仕事や御家族の事情等のある中を、各国の期待に支えられての、来日とうけたまわっております。今までの海外代表の方々が帰国後、日本の姿を詳しくお伝えいただいていることを聞くにつけ、こうした人々の輪が深く広く育っていることに感謝の気持ちで一杯でございます。

どうぞ皆様、ゆっくりとおくつろぎ下さいまして、心を開いた率直な意見交換をなされますよう御願い致します。

右・土光、MRA日本協会会長とも意見を交換する
右端は東芝高瀬顧問
左・日本をより理解しようという熱気に溢れる桑原労働次官との会見

家庭を通して日本を知る——東芝労組、河野委員長のお宅を訪ねるカデッヂ夫妻、シュプレング夫人（スイス）

全日通労組、梅田書記長とペナントを交換するカデッヂ夫妻



工場見学も盛んに行われた（東芝、鶴見工場）

産業人会議に寄せられたメッセージ

自由世界を通して、現在、労使関係は極めて困難な時期にあります。

地球時代における産業の役割を考えるとき、労使双方は相互に依存することを認識し、それなくして両者の繁栄はないという考えを優先させるべきです。

経営者は労働者に対して可能な限り福祉と労働条件について配慮し、そのために会社と産業は努力を傾注すべきです。

一方、労働者は経営者の施策を認識し、経営者が栄えぬ限り労働者の生活は脅威にさらされることを考えて最善を尽くすべきです。

相互依存を基盤とした労使関係の歴史をもつ日本で第四回産業人会議が開催されることはまことに時宜を得たものと考えます。産業界から対立状況をとり除かなくてはなりません。各国の経済状況がますます困難の度合を深めるか、あるいは現在の不況を民主的社会の枠組の中で克服していくかという岐路にたつとき、協調すること以外にないということを労使双方が認識すべきだと思います。

ニュージーランド首相
ロバート・マルドーン

世界経済が極めて困難な局面にあり、精神的リーダーシップが強く必要とされているこの時期に貴会議が開催されることについて心からの祝辞をお送りいたします。

今回は残念ながら参加出来ませんが、日本の皆様に対して暖かい友情を心にきざみつつ、会議のご成功を祈念いたします。

オランダ、フィリップス社会長
フレデリック・フィリップス

箱根・東京会議を通じた海外および日本の代表双方の発言の一部をご紹介致します

木内信胤氏
（世界経済調査会々長）

国際会議というのは一般に、たいへん要領の悪いものなのです。知らない同志が集まって、しかも違う文化を背負っております。世界的にみれば、国際会議にはあきがきているということとかと思います。ところがこのMRAの会議はそこがちょっと違うのです。つまりお互いに基礎的な信頼感をもっているわけです。自分を忘れて全体のことを考えている人たちで、嘘は決して言わないという信頼性がありますから初対面で話が始まり、心を許して話をしますから非常に効率がいいのです。

ジョン・ヴァン・ダ・ウォーター氏
（アメリカ・経営コンサルタント、元カルフォルニア大教授）

日本の友人からアメリカは変わらねばならないとご指摘をいただきました。たしかに私たちの生き方、考え方を他国に強いるというか、おしつけてきました。アメリカはもっと謙虚に現実的にいろいろなことを考えなおし共に考え、共に学んでいくように変わらねばならないと思います。この会議を通して日本が国際的にリーダーシップを発揮しておられることを高く評価いたします。

坂本　勇氏
（住友電工・会長）

学生時代にまず行動することにより心が伴うことを教えられてきた。はじめてMRAの会に出席し、箱根の会議は二日間終日聴く努力をした。ひき込まれないようにと努力したが、皆さんの真剣な討議と信念に心をうたれた。物質よりも精神革命をと言うMRAは如何なる宗教をも超越すること、そして良心の教えにしたがって行動するという基本を学んだ。一人でも多くの方が実践されることを望む。

ジョセフ・ホワイトヘッド氏
（カナダ・ジャーナル・オブ・コマース社社主）

カナダは資源にめぐまれ物質主義の傾向が強い。しかし日本には技術と豊かな愛がある。私たちはともにその豊かさにおごることなくアジアを愛していかなくてはならない。日本とカナダが、太平洋の諸国を助けていくことが共通の使命である。

私たちは労使関係についても日本のやり方をもっと学ぶべきだと考えている。

中島正樹氏
（三菱総研・会長）

日本は何をすべきかということを民族として考えなければならない時代にきている。人類に何を貢献できるか。これがいまの最大の問題でなければならない。日本は単なる影響力のある経済国家であるだけでは許されない。進んでわれわれが習った東洋文明と西洋文明との何かを統合する新しい道を求め、それを通して人類に貢献出来るよう望んでいる。

アーチ・マッケンジー氏
（イギリス・元国連公使、元チュニジア大使）

世界は新しい章に入っていることを感じる。一九七四年のオペックの石油価格値上げは世界の力関係を変えた。

今までのようにアメリカ一国のみの指導性に望みをかけることは出来なくなってきている。西側全体で新しい形のパートナーシップが必要であり、その意味で日本は新しい役割りを持っていると思う。

マーシャルプランはヨーロッパに経済的基盤で融和をもたらせたが、そのかげにはドイツとフランスの融合を生みだしたMRAの働きがあった。今日においては世界的規模でのマーシャルプランに匹敵するものが必要である。それにより経済が機能するようにならなければならない。

金森茂一郎氏
（近畿鉄道・専務取締役）

幼い頃から仏教の環境に育ったのでMRAも日本人に合うよう翻訳して理解している。日本人の好む言葉に和がある。聖徳太子の十七条の憲法第一条が起源と考える。千四百年前につくられたが、まさにMRAの精神そのものである。派閥をつくらず、仲良く、他人が異なる意見を述べても怒らない、自分の意見に誤りがないか良く反省せよ、など現在のわれわれの生活にあてはめて教訓になることが多い。

ウィリー・ハラー氏
（ドイツ・インターフレックスデータシステム社長）

労働の分担（ワーク・シエアリング）の概念というのは、高度成長に一つの歯どめをかける意味で有効ではないかと思う。また環境に対するわれわれの憂慮、心配ということも新しい指標ではないだろうか。日本は元来、文化的にも宗教的にも自然界との調和ということを非常に大切にしてこられた。自然との争いに終止符をうってもっと調和のとれた成長をはかるように助けて頂きたい。

赤城海助氏
（日本通運・副社長）

わたしは、十数年前までは、非常に傲慢無礼で、おれが、おれがと、全てのことにタッチしていた。ある時非常に大きな精神的打撃をうけ三日三晩ねむれない事があった。その時に、わ

たしの心を開き再起をうながしたものは、聖書であり、特にその中で「全ての知識の始まりは、神を畏れることである。」という言葉だった。それまでは、わたしは神をも畏れぬ不貞の輩であった。物事の変化に対し、憤り、あせり、悲観し、心の平安がなかった。MRAの四つの信条が本当に日頃苦しんでいたいろいろな問題に対して心を開いてくれたありがたい言葉のように感じた。「人が困った時神に聴きなさい、そうすれば神はおのずからこたえてくれる」これを自分なりに考えると祈る事、心に聴けという事は、神の声を聴けという事だと解釈する。それから、どんな事があっても恐れない、そして侮らない、そういう気持ちでいろいろな人と接触する。そうすることによりMRAの精神は必ずや伝播すると考える。ギャップだらけの世界そしていがみあい、憎しみあい、自分さえよければという世の中にあって、MRAが普及すれば、美しい世界ができあがると思う。自分の生存中は不可能かもしれないが、それが神の命じたことであるとわたしは確信して皆様方と手をたずさえて、この運動に全力を尽くしていきたいと思っている。

チュン・ジュン氏
（大韓民国・韓国MRA代表、元国会議員）

第二次大戦が終った直後に、アメリカとソ連が朝鮮半島を半分に切ってしまったため、わが民族は分裂し、憎しみをもってお互いに対峙し、国内的にもいろいろな憎しみと分裂が起き、非常に不幸な民族となっています。しかし私は決して失望しません。私は、また韓国の若い人たちも希望を持っています。百年間、こんなにも苦労してきたこの民族を神はお捨てにならないと思います。民族性をMRAを通して改造して正しい考え方をし、行いを正すならば、神は韓民族を祝福して下さるということを確信してやみません。

山田　稔氏
（ダイキン工業・社長）

箱根と東京の会議に出席して、私にはまだ変化は起っていないが、四つの絶対標準は強く焼付いている。勇気をもってチェンヂし、使命感に燃えておられる方がたに接することができ、またいろいろと親切に体験を語って下さった熱意に心から感謝したい。それは生涯忘れることのない想出となった。皆さんの考えに共鳴するものの、個人の変革から社会の改造へと、英知と善意のみに頼ってゆける時代になりうるか私自身疑問もあるが、解答を見出すために努力したいと考えている。

ジェフリー・リーン氏
（イギリス、ジャーナリスト、「地球病の時代」著者）

私はジャーナリストになる前には環境問題については殆んど知りませんでした。しかし、勉強を進めるにつれ、これらの分野でおこっていることは世界の未来を左右する重要なものであることを確信しました。例えば、五才以下の幼児が毎分実に二十八人、飢餓で死んでいくというのが現在の世界の事実です。年に換算しますと毎年五才以下の幼児が五千万人死んでいるということです。ということは、その子供の死を悼む両親の数は一億人いるということです。生き残った幼児も、栄養失調のために脳が、永久的な障害を受けて、まともな成人には達し得ないということです。世界はすべての人類を養うに足るだけの食糧を生産しながら、一方では幼児がこれ位の数、毎年死んでいく。子供が死ぬのは、その親が食糧を買うだけのお金がないからです。年間一万二千円位の所得しか稼げないのがこれらの大半の親なのです。二十年後の西歴二千年には、今の貧しい人たちの数が、三倍になるといわれております。ということは先ほどあげた数の三倍の幼児が死んでいくということです。しかしこれは防止できることなのです。それには一人ひとりがその持場でベストを尽くす必要があります。自分はジャーナリストとして筆をもって訴えていくつもりです。

河野一義氏
（東芝労組・委員長）

固く正直すぎるというので〝ドンカチ〟というニックネームを頂いていたが、一九七七年にスイスのコーに行き正直さの必要性を再確認し自信を持った。MRAの四つの標準というのは今の世の中でもっとも必要である。

世界で現在起きている人類の危機とも呼ぶべき事態は相手の立場を考えない自分本位の利己的な考え方に起因する。日本の国を整備し、政治を正すためには四つの道義標準を守れる政治家を増やす必要がある。労働組合もまったく同じで、建前と本音の使いわけがあってはならない。労使の関係は対等に、相互信頼を基に話し合いをもって解決するというのが基本でなくてはならない。問題解決にはMRAの精神が必要である。つまり無私の精神を欠き利己的になると公正な解決にならないし、良心の働きや正直さに欠けると妥当な結論は生まれない。地球上約四十億の人間全てが民族や国境を越えて楽しく健康で豊かなしかも安心できる生活の実現を望んでいる。私達の回りには資源、エネルギー、インフレ、失業等、繁急に解決すべき問題が山積するが、一人ひとりが秩序と調和のある社会の実現を目指して、MRAの四つの道義規準に照らし、自らに恥かしくない行動をとるならば一歩づつそれが実現していくのではないか。私自身も私なりの立場で頑張っていきたい。

エトヴァルド・ブローヴッヒ氏
（ノルウェイ・経営者連盟地域アドバイザー）

人口四〇〇万人のわが国では国のレベルで労使協調をしている。しかし昨日訪問したある日本の会社の社是に感銘をうけた。それは〝和は力なり。共に信じて結束を、広く世界の文化と福祉の向上に貢献する〟ということだった。これをわれわれも学びたい。みなさんと共にこの道を進みたいと思う。

ダニエル・リュー氏
（中華民国・元ニュージーランド大使、中華文化学院教授）

第二次大戦のあと中国が共産化したとき、われわれは外国からの侵攻には抵抗できたが、内部からの挑戦には対抗出来ないことを知った。中国本土が共産党の軍門に降ることに対して、教育もあり強い意志を持つと自負する私は何ら為すすべを知らなかった。MRAに会った時、自分から変り、国に対して責任をとることを学んだ。私は長くカナダに住んでいたが、台湾にもどる決心をした。

ジャック・ケネディ氏
（オーストラリア・テレコムオーストラリア・技術管理員）

創造性、心、意志といったものを日本とオーストラリア両国で啓発していくことができる。

そのような相互依存関係というものが地球時代を迎えた両国の新しい課題だと考える。

梅原志朗氏
（政策推進労組会議、事務局次長）

われわれは、第一次オイルショックの経験からインフレがスタグフレーションにつながり労働者の雇用不安を招くことを知っており、また道徳的頽廃をもたらすと考えている。今年の賃金要求も労働界の多数が八％とすることに合意し、交渉の結果平均的にみて七％で妥結した。国民は物価抑制に強い関心を寄せている。労働組合としても組合員の要求に応え、物価抑制に努力をしなければならないと考えている。

そのためには、輸入品価格上昇による卸売物価の上昇が消費者物価に及ぼす影響を最小限にとどめ、ホームメイドインフレにしないこと、そのためには生産性の向上が大切である。また消費者としても消費者態度の見直しを行ない、それぞれがインフレ心理を排することが必要である。政策推進労組会議（民間労働者約五百万人の集り）は、物価抑制を最大のテーマとして掲げ、毎月、経済企画庁との定期会合をもって情報、意見の交換を行っている。また加盟各組合に対して、それぞれの属する企業の価格決定に発言力を強め、労使協議のテーマの一つとして取り上げるよう求めている。問題を他人の責めに帰することで解決しようとすることは誤りであり、労働組合も自らの責任と行動で物事に取り組む姿勢が必要である。

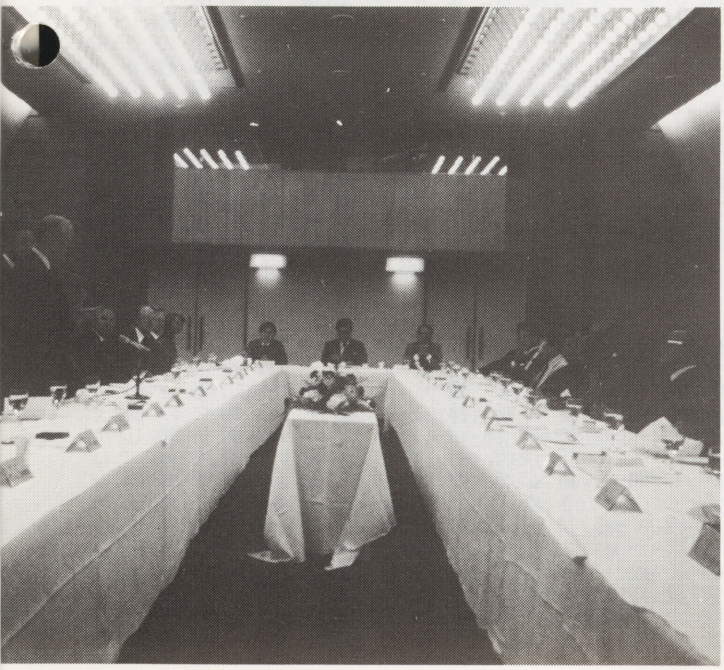
箱根・東京の会議の後、海外代表の多くは関西を訪ねた。その際の模様を住友義輝氏（住友電工・監査役）にレポートしていただいた。

住友義輝氏

外国の科学、制度を学びとることは、出来ても、それを培った無形のものを理解するのは、難しい事である。箱根と東京の産業人会議に海外から参加した三十二名のうちの多数が、京都・奈良に日本の文化を訪ね、心に触れ、また大阪では経済人を主体に更に交流を深める事が出来たのは、お互いに理解を高めていく上で大変有意義であった。

こんな立派なバスはイギリスのフットボールの優勝チームも

関経連主催の午餐会で話すマッケンジー氏（元国連大使、元チュニジア大使）



乗ったことがないだろうというデラックスバスで、緑濃い古都の簡素ながらに高遠な京都御所に心を静め、裏千家、今日庵のお点前に和敬静寂を知り、東山を庭とする住友有芳園では家祖七〇〇年の廟堂に、事業精神の源流を見た。

奈良郊外、天理丘陵の古墳に囲まれた、シャープ総合開発センターは、世界の文化と福祉に貢献することを社是として、新材料と人材の開発が進められている。過去と未来が、はからずも併存する珍しい環境は、日本の企業のあり方を象徴しているようでもあった。

続いて訪ねた天理教本部の壮大なコミュニティでは活発な若者達の実践的な奉仕活動が日本の案内書には見られない一面として特に印象に残った。

ブックマン博士の誕生日に催された新住友ビルの大阪集会に午後六時半からという会社の幹部の人達には不向きな時間であったにも拘らず、中堅企業の幹部社員を中心に百二十名を越える参加者を得、その夜は海外代表の何名かが迎えられて、日本の家庭に泊った。関経連主催の午餐懇談会はマッケンジー夫人の為にバースデーケーキが用意されるというハプニングを交えて、企業のトップ十五人と二時間半を過ごした。

個別に分れては、住友電工亀井社長（関経協会長）、日経新聞佐々木代表、サンケイ新聞永田代表などと懇談、マッケンジー、リーン両夫妻は京都と神戸の市民大学講座その他にゲストスピーカーとして招かれるなど幅広い活動が行われた。

最後の夜の日立造船主催の懇親晩餐会は、京阪神の日頃のチームによる内輪の会として砂野、山村の諸兄など久々の顔も集まり心暖まる友情にあふれたものとなった。

三回の会合はそれぞれ集る人達が異るところから毎回特色のあるものとなったが、今回初めてMRAに接する人も少なくなかった。

ここに関西で交換された意見の要旨をまとめることが許されるならば次の通りである。

■世界は新しい局面に入った。今や西側全体の世界的な規模による新しいパートナーシップが要求されている。

■第三世界の貧困は経済が正しく機能することを妨げる要因となっている。日本は西欧と違った意味で発展途上国と協調しうる国である。

■日本は自由世界における責任と役割りを自覚し、協力してほしい。

■世界はトップ会談で変わるのではない。この場に居るような我々にその役割りがある。少数の人が変わることによって世界は変わってきた。外交官会議でも、労使の立場でも、夫婦、親子の関係でも一人が勇気を持って正直になった時融合が生まれ、流れが変わった。必要なのは知識ではなく生活の質である。

■コーの大会は個人の集まりで友情と信頼関係をもとにしているので普通なら不可能なことが、あとになって解決されるのに役に立つ。

■共に生き、共に試練を分ち合い、助け合う。そうする中に夫々の人ならではの役割りがある。

■日本の側としては、絶対正直を信奉する人達の話すこととして終始謙虚に、素直に聞き、また正直に質問、反論することができた。

■日本は西側世界のリーダーとなるべき国として過大の期待を頂いているようだが、外国を知るということは大変難しいことである。とは言え、道義革命で世界を救い、貧困をなくし、世界に平和をもたらすこのMRAの運動には心から共感し、出来る限りの協力を惜しまない。

終りにあたって、三日間のこの実りは、関西世話人の方々はじめ数多くの方々の物心両面にわたる多大の御協力によって生まれたものであることを銘記したい。

大阪大会で司会をする住友義輝氏（住友電工・監査役）

新しい出発の日

旧青年団員アジアセンターに集う

昭和三十二年、日本青年団協議会、日本健青会のリーダー百名がアフリカのマキノ島で開催されたMRAの世界大会に出席した。

二十三年の歳月は流れ、当時の青年たちはいま各地で、それぞれ市長、県会議員、市会議員などを務めており、また教育、文化振興の面でも活躍している人が多い。当時マキノの会場で、歌われた〝右でもなく左でもなく、まっすぐに〟という歌の心は、この青年たちのその後の生活の指標となり、〝誰が正しいか〟でなく〝何が正しいか〟を判断の基準とし、それを実践するという道義革命が心の支えとなって今日に至っている。

国際産業人会議が終った五月三十日、小田原のアジアセンターに十二名の旧青年団のリーダー達が集まって産業人会議に出席した国際代表たちと話し合った。

「何が正しいか」を行動の指針にと語る渡辺五郎三郎氏（福島県知事秘書）左隣は井戸沼俊穎福岡県議会議員

全員集合「われら世界家族」

福島県知事の秘書役として活躍中の渡辺五郎三郎氏と同県の県会議員井戸沼俊穎氏とは互いに所属政党は与野党に分れる立場にあるが、この日は共に出席し、今後協力して福島地方にMRAの集りをもってその輪をひろげていきたいと話していた。

前川直弥氏（小田原）は夫人と三人のお子さんを伴って参加し、国際代表と親しく語りあった。「私にとって今日は新しい出発の日となった」と語る同氏の言葉に代表たちは心から激励の拍手をおくっていた。

増田敬作氏（姫路市市会議員）は「私たちはかつてアメリカから多くのものを与えられたが、いまは私たちがアメリカのために何ができるかを考える時期にきていると思う。マキノ島でお世話になった他の仲間に呼びかけて、何からすべきかを話し合う機会をぜひつくりたい」と語った。

▽▽九州MRA協力会便り△△

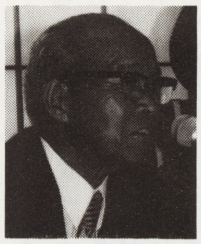
五月二十三日の午後、九州MRA協力会は、会員会社の有志四十名の出席を得て、恒例のMRA講演会を福岡市中央区のはかた会館で開いた。講師は、韓国MRA本部代表チュンジュン氏、同氏はことし初めて箱根の産業人会議に参加されたが、当協力会では、特にお願いしてご帰国の途次、福岡へお立ち寄りを願い、前記の講演会をもったもの。チュン氏は、実は当協力会のメンバーには顔なじみのかたである。ここ十年来、毎秋訪韓視察団を派遣して同国のきびしい政治環境やたくましい経済成長を直視するのが年中行事の一つとなっているが、そのたびに一行のためにお膳立てをし、親しく迎えていただいているのがチュン氏なのだ。その警咳に接した団員はいまや二百名にも達する。いうなれば、この日はまるで恩師を囲んだ訪韓団員の同窓会のような雰囲気さえただよっていた。

（チュンジュン氏）

同氏は、十六年に及ぶ長いMRA体験をふまえて、「現在の韓国に必要なのは道徳しかない。道徳だけがわが祖国を救う」と二時間を超える長時間、疲れもみせずに固い信念を披露しつづけられた。

折からの光州暴動事件にもふれて、「過去百年、悲惨な事態ばかりを招いてきた韓国は、何という不幸な国であろうかと涙することもあるが、私は希望は捨てない。MRAがかならずや祖国を救ってくれると固く信じている。皆さんも他人ごとと思わず、どうか一番近い隣国に力を貸して欲しい」、と熱誠あふれるスピーチをつづけ、参会者のあいだに、静かではあるが深い感動の波紋を呼び起こさせた。

私の幸福論



河原亮三郎
（東芝機械㈱・相談役）

幸福とは何か？

人間はこの世に生まれてきて、もの心がついてくると、いろいろの欲望が限りなく発展していくものである。目先の衝動的欲望に追い回されながら　とりとめもなく齢を重ねていくものも居るが、大多数の人びとは安定した幸福を願って夫々計画を立て希望を持って厳しい人生行路の支えとしているのが実際の姿ではないだろうか。

昨年ある雑誌に日本人の幸福度調査の結果というのが出ていた。最高に幸福であると感じているものを百点とし幸福でも不幸でもないというのを五十点、最も不幸であるというのを零点とすると、八十点以上が三八％もおり、五十点以上八十点未満が五五％もいるが、明らかに不幸であると感じているのは七％以下となっている。普通の実感と多少違うようにも思えるが、現在の日本人は概ね幸福であると感じていることは間違いなく、まことに結構なことである。

この数字を報じた人は、人間は主観的にはたとえ十の不幸にとり巻かれていても決定的に幸福を感ずる一つの領域があれば一挙に幸福になれるものである。しかしこれは全く主観的なもので、自分と密接な関係にあるすべての人々のなかで、果たして本当に幸福を味わえるかどうか疑問である。また、オーストリー人の精神医学者、ヴェラン・ウルフの「幸福に生きるということは芸術であって、およそどんな人でも、わずかな知性と、勇気と、そうした、ユーモアのセンスを持っている人なら習得できるものである」ともいっている。また、経済学者サムエルソンによれば、「幸福とは物的消費の量を欲望で割った答えによって表わされる」という。物的資源は有限であって欲望は無限であるとすれば、この公式では欲求不満がつきまとい、むしろ幸福の表現には適切でないように思える。

イギリスの諺で「幸福はすべて心にあり」とか、トルストイの幸福とは後悔のない満足である」とか、また徳富蘆花の「幸福は笑う」といった具合に心の幸福をうたったものが圧倒的に多いのである。「幸福中の最大なるものは心の快楽である。健康の幸福がこれに次ぎ、金銭の幸福の如きは最下等に位するものである」という西洋のある賢人の言葉は決定的に心の幸福を指摘している。前述のサムエルソンの公式や、日本の古い諺にいう「金は阿弥陀ほど光る」とか、「地獄の沙汰も金次第」のように金や物の力をうたったものもないことはないが、「金が仇の世の中」といったように、金がしばしば幸福形成を妨げていることを警告したものが珍しくない。

要するに通常は人間には金に魅力があり過ぎるので、兎に角これが因となって人間が不幸に陥りがちである。これを戒めて先輩賢人達はもっぱら心の幸福を強調しているものであろう。しかし近代の経済社会に生きる限り、物や金銭の力を軽視することは出来ない。「恒産なきものは恒心なし」とか「衣食足りて礼節を知る」といった古い言葉はそのまま今日も庶民に納得されやすいことも事実である。

私の幸福論

幸福とはこのように古今東西の百家がいろいろの形で指摘しているが、私はもっと日本の庶民にわかりよい幸福論がないものかと考えてみた。

日本の幸福という字はどうしてできたか、私は知らない。しかし辞典によると「幸」とはさいわいとか、しあわせというほかに、いつくしみとか、親愛とかの意味がある。したがって、「幸」のついた熟字に、幸臣と書いて寵愛される臣、幸遇と書いて厚くもてなされる。幸甚と書いてありがたいを意味するなど、要するに「幸」は心のしあわせ、すなわち金銭で買えない仕合せを意味するようである。

一方「福」にも、さいわいとか仕合せとか同じ意味がついているが、そのもとはお祭りに集まった人たちに下さる御酒（おみき）とか、神様に供える肉の意味があったり、また、福祉とか福利とかは、みな概ね金のかかる施設を必要とすることでもわかるように、要するに「福」とは「物」の仕合せであり、金銭で購わねばならぬ仕合せであることがわかる。

日本ではこんな「幸」と「福」とを組合せて仕合せのことを「幸福」といっているように思えるのである。「幸福」という言葉の発祥について調べたことはないが、少なくとも英語のハピネス（Happiness）とか、ウエルフェアー（Welfare）、そのものと異なり、その複合であることが容易にわかる。深い思慮の上に出来た言葉であると思うのである。

ところで「幸」と「福」とはこのように本来異質のものであるが、この両者の間には密接な因果関係がある。たとえば「笑

う門には福来たる」という諺がある。これは、笑うということは心の仕合せであることを意味し、いつも笑っていられれば食欲もすすみ、しかも消化がよくて栄養の吸収もよく健康が保てる。したがってよく働けて収入もよくなる。そして万事身のまわりが豊かとなって幸福な生活が営まれる。といった関係がわかる。

この因果関係は数学的にみれば掛け算である。すなわち、幸福は幸と福とで合成されるが、両者の和ではなく、掛け算によって合成される。こう考えると、幸福という字は実によく出来ている。幸と福とは互いに助長し合ったり、相殺しあったりする。従って幸と福とに費されるエネルギーを一定（たとえばこれを一〇）とすれば、これを両方に均等（五対五）にふり向ければ、合成される幸福の量は、五×五＝二五となり、これは一〇のエネルギーで得られる最高値であり、この振りわけが何れかに片寄ればその程度に従って幸福の量は必ず減少する。極端な場合、その何れかに完全に片寄った場合は〇×一〇＝〇で幸福の量は零となり最大の不仕合せが実現する。

日本の幸福＝幸×福は、サムエルソンの幸福＝物的消費÷欲望とちがって、まごとに深みのある哲学ともいえるのである。しかも幸と福とがバランスするとき、幸福の量が最高となる構図はまさに芸術的であるともいえる。ヴェラン・ウルフの、「幸福に生きるということは芸術である」というのがわかるような気がするのである。

この哲学が日本伝統の幸福論であるとみるのが「私の幸福論」である。これが長い工場生活の現場から発見されたもので、専門家には一顧の価値もないものかも知れないが、こんな考えかたで老齢八十歳まで生きてきた私はいま、ささやかではあるが悔いのない余生を楽しんでいることだけはたしかであることをつけ加えて大方の批判をいただきたい。

幸福実現の方途

以上のような幸福論の発想を一応認めたとして、その実践は一体どうすればよいか。これがむしろ重要な問題である。

まずわかりやすい「福」の方からとりあげる。福とは結局、今日の社会生活のなかではお金であるから、その使用の仕方や、これを稼ぐ手段は誰でも知っている。昔から「稼ぐに追いつく貧乏なし」と日本ではいい伝えられて来たが、きびしい現在の世相では、このいい伝えをそのまま受入れにくい反面もあるかも知れない。たとえば石川啄木の「働けど働けどわが暮し楽にならざり、じっと手をみる」という歌が今日も尚なんとなく懐かしまれているようでもある。しかし労働組合の春闘が高度成長で生活水準の高度化した今日尚この歌の味を正面に立てて要求し、闘ったのではもう一般受けがむずかしい。むしろいくら働いてもそれが社会に買われる生産とならなければ啄木の歎きは当然のことと受けとめられるのが落ちである。福を手に入れるためには単に汗を流して動き回ることではなく、その労作が常に社会の役に立つ、即ち売れるもののために汗を流すことでなければならぬ。要するに自分のエネルギーを最も有効に使って低コストで良質の生産に心掛けることが福を手に入れる簡明な方法である。

いずれにしても福を手に入れる生活の仕方はそう簡単ではないが、誰でも生まれながらにしてそのために才覚を傾けているのである。

しかし心の仕合せ「幸」は、所謂ソフト中のソフトでわかりにくい。ドイツのシラーは、「友情は喜びを二倍にし、悲しみを半分にする」といっている。金で買えない心の仕合せ、すなわち「幸」を自分のものにするためには、家族や職場の同僚や地域の隣人との交際にいつもうるおいを保たねばならない。誤解や怒り、憎しみや恨み、感謝を知らぬ心等から出来るだけ自由にならなければならぬ。そんなことは解り切っているが、どうしたらそうなるか。そんなことが出来たら最早人間ではなく、神様であると、全く手をつけようとしないことになりがちである。これはいささか食わず嫌いと同じである。よいと思ったことは進んでやってみるかどうかで人生は大きく分れる。

私は人間の心の生活について次のように考えてみた。

① われわれは自由主義的競争社会に生きている。

② 自由主義的競争社会成立の原動力は利己心である。従って利己心そのものは悪くない。

③ しかし利己心を終極的に満足せしめる生き方は所謂人の道を守る、即ち道義の実践以外にない。なぜならば人の道に外れたことはすぐ他人に突き当り、引返さねばならぬからである。

かつて松下幸之助氏が、「道徳は実利に結びつく」というパンフレットを出したが、そのなかに、われ先にバスに乗りたがる人々は結局先着順に行儀よく並ぶことがみんなおだやかに、そして早く乗れると書いてあった。まことに簡単なことであるが、これが心の仕合せを掴む最も確かで手っ取り早い方法である。

道徳の基準

道徳といえば誰でもちょっと毛嫌いするが、この世の中は誰もが良いことをし、悪いことをしないという約束事で成り立っているのである。この約束が何となく守られているのが文化社会の特色である。そして、われ

われはみんな文化社会に生活することを望んでいる。良いこと、悪いことをきめるのが法律であったり、習慣であったりだが、その基本は道徳である。その道徳とは簡単にいえばどういうものか。文化社会に普遍的な道徳の基準を拾ってみるといろいろあるが、もっともわかりよいものに、道徳再武装運動（MRA、アメリカ生まれのフランク・ブックマン博士が一九三八年創立した）がつかっているものがある。それは、つぎの四つである。

(イ) 絶対正直
(ロ) 絶対純潔
(ハ) 絶対無私
(ニ) 絶対愛

また別にこれもアメリカで発足して現在世界中に広く活動している国際ロータリーが、一九四六年に版権登録した四つのテストというのがある。それはつぎのようになっている。

(1) 真実かどうか
(2) みんなに公平か
(3) 好意と友情を深めるか
(4) みんなのためになるかどうか

この両者は表現は違うが、内容は全く同じであることがわかる。すなわち(イ)と(1)、(ロ)と(4)、(ハ)と(2)、(ニ)と(3)とを対比検討すると同義であろうことが容易にわかる。(ロ)と(4)が同義であることはちょっと難解であるが、「純潔とは自己の支配し得るエネルギーを最も有効に使うこと」（あるイギリス人ドクターの話）と理解すれば、「みんなのためになる」ことと一致することがわかる。

さらに東洋のものをもう一つ取り上げると、孟子は人の心に生まれながらに備わっている四つの徳として、「仁、義、礼、知」をあげている。

仁は惻隠の情であって愛に通じ、義は羞悪の情であって純潔に通じ、礼は辞譲の情であって無私に通じ、知は正邪判別の情であって正直に通じる、とある知者に教えられたことがある。解るように思う。

要するにこれ等四つが、人間社会にきわめて説得力のある普遍的な道徳の基準であるといえる。

これ等四つの基準に従って出来るだけ自らの生活を正そうとすることは言うは易いが、行うことは如何にも難しいと思うのは人情である。しかし利己心に満ちた世相の中でその利己心を蒸留することに努力すれば、それがひとりでに道義心に移行して行くものであることは案外手近に起こっているのであるまいか。ただ利己心に移行する課題で欠くことが出来ないのは、従来の習慣と考え方を変えることである。

考え方を変えるためには従来ことにぶつかって判断に直面したとき兎に角、「誰が正しいか」に基づくきらいがあったものを「何が正しいか」に基づくようにすることである。

何が正しいかをきめるのは最終的には神であるが、この神とは遠くにあるものではなく、われわれの身近な良心の中にある、と前述のフランク・ブックマンから教えられた。だんだんとわかるような気がするのである。

この利己心で渦を巻いているように見える社会で、そんな奇麗ごとが現実の問題として身につけられるものだろうかと思うのも人情である。自分だけでもその努力をすれば少なくとも自分の幸と福とが一歩前進し、しかもそれが自動的にバランスして身につくと思ったらやってみる価値がある。少なくとも私が今から四分の一世紀も前、五十三歳のときスイスのMRA世界大会に出席して帰ってから忙しい業務の中でこんなことを考えながら生活しただけで、労務という厄介な仕事が著しく楽になり、若い頃五十年も生きられたら沢山だと思っていた私が満八十歳になって尚若い人達と喜んで仕事が出来る幸福を味わっていることだけは自信を持っていえるのである。随分と偉そうなことを平気で書き連ねたがこれも一途に中高年層の方々に何が正しいかを発見する多少のノウハウを知らせたかったからに過ぎない。読者の御寛容を願いたい。

＊本稿は昭和四十四年二月十三、十四、十五日に亘って、NHK朝の人生読本の時間に放送したものの改訂版である。

御案内

国際MRA日本協会は、倫理性と調和をもった世界作りのため、世界のMRAチームとの連繋のもと諸般の活動を行っております。毎年開催される国際産業人会議もその一環であり相互理解と信頼の絆は年々強まっております。他にも人材育成のための研修生の海外派遣、研究会、講演会の開催等々、日本人の『心の開国』を推し進めるために活動しております。ぜひこの活動にお加わり下さい。御入会下さった方にはニュース初め各種会合の御案内をさせて頂きます。

一、会費（年額）
個人一口　五〇〇〇円
法人一口五〇〇〇〇円

一、払込先
第一勧業銀行代々木支店（普）一六三三―一〇一
四三三六　国際MRA日本協会宛

※なお、ご連絡は左記まで。
〒151
渋谷区代々木一の五七の二
ドルミ代々木三〇八
国際MRA日本協会
☎03―三七四―七六〇〇

MRA

国際MRA日本協会